

文法学

藤田 保幸

もっぱら現代日本語に関する研究を念頭において述べるが、まず、日本語文法研究に今後大きな影響を及ぼしそうなものとして、国立国語研究所において構築が進められてきた『現代日本語書き言葉均衡コーパス』があげられる。これは、先に開発された『日本語話し言葉コーパス』とあわせて、実に1億語以上の規模を目指すものであり、2010年度末の完成を目指している。こうした日本語の実態を十分に反映する「代表性」を有するコーパスが完成することで、内観を有力な方法としてきた現代語の文法研究にも、新たな局面が開けるものと見られる。上記コーパスについては、近くは『人工知能学会誌』24巻5号(2009)に特集があり、多様な角度からの紹介がある。

さて、2010年度に公にされた諸研究の中で、以下特にとり上げてみたいのは、加藤陽子(2010)『話し言葉における引用表現』(くろしお出版)である。副題に「引用標識に注目して」とあるように、本書は、引用助詞「と」「って」に注目して、話し言葉における「～と」「～って」形式による引用表現を考究したもので、とりわけ文末に引用助詞を伴う「～と。」「～って。」のような文の記述に力を注いでいる。もっとも、「引用」を筆者(藤田)の考えを承けて「所与の言葉を実物表示の形で発話の内に再現する」(19頁)とする定義からすれば、本書が扱う事柄は、「～と／って」形式で取り上げられるのが「所与の言葉」と言えないものもあり、「引用表現」

と一括するのは、厳密にはやや問題があるかもしれない(いわば、「引用」の表現及びそこから用法拡張として位置づけられる諸表現を論じたものというべきだろう)。しかし、そうした小さな問題は措いて、本書では、個々の言語事実を広く整理し、話し言葉の表現として意義づけつつ、それらに一つのまとまった俯瞰を与えている。殊に、文末に「と」「って」を伴う文を全般に詳しく記述したうえで、それらの「と」「って」が、「引用」を表すものとしての標識からどの程度機能を拡張しているか(特定の文法的意味を担う形式にどの程度転じているか)についての測定を試みたことは、いわゆる「文法化」の問題とも関わって、この種の表現をトータルに考える興味深い分析と言える。

また、言語事実の観察においても、例えば、話し言葉では、「～と／って」で複数の文を引く場合、『A。B。C。』と言った』のような形ではなく、「Aと、Bと、Cと言った」のように一文ごとに並列する形がとられることがよく見られるが、これは、時間とともに消えてカギカッコ等の視覚的手段によることができない話し言葉において、引用されたコトバであることを明示するための独特の方法であるといった指摘など、種々納得させられるものがある。もとよりその所論について、筆者自身細かには見解を異にするところもあるが、本書が今後の話し言葉における引用表現の研究に際し、参照すべき一つの拠り所となるものであることは疑いない。本書を得て、引用研究もようやく一歩進展を見せたと言ってよかろう。

(龍谷大学)